

梵文和訳『阿毘達磨雜集論』 —安慧による冒頭偈—

阿毘達磨集論研究会

研究会代表者 那須良彦（社会福祉法人金剛樹心会理事長）
研究会メンバー 加納和雄（高野山大学准教授） 李学竹（中国蔵学研究中心宗教研究所教授）
吉田 哲（龍谷大学講師） 松下俊英（大谷大学非常勤講師）
早島 慧（龍谷大学非常勤講師） 高務祐輝（京都大学非常勤講師）
横山 剛（京都大学大学院生） 間中 充（龍谷大学大学院研究生）
吹田隆徳（佛教大学大学院生） 田中裕成（佛教大学大学院生）

はじめに

本稿は、安慧（Sthiramati）が編纂した『阿毘達磨雜集論』（『雜集論』⁽¹⁾）の冒頭箇所⁽²⁾の梵文和訳を提示するものである。当該の箇所は、安慧が自作の偈を提示し、それに対して自注を施す体裁をもつ。

『雜集論』の内容は、無着（Asaṅga）による『阿毘達磨集論』（『集論』）本文と、獅子覚（*Sīṃhabuddhi）に帰せられる釈文⁽²⁾とからなるものであり、安慧による文はほとんど含まれないが、今回扱う冒頭箇所のみは、安慧自身の文といえる。今回提示する箇所は、前稿において提示した梵文和訳の直前の部分であり、無着の本文が始まる前の序文にあたる。

これまで『雜集論』は、漢訳とチベット語訳の形でしか確認されていなかったが、このたび、本稿執筆者の一人である李学竹が新たに同書の梵文写本の存在を報告し、翻刻を発表し始めたことにより、当該の冒頭箇所⁽²⁾の梵文も得られるようになった。ただし第一葉はなお欠損してお

(1) 『雜集論』のチベット語訳所掲梵文題名: *Abhidharmasamuccaya-vyākhyā*、梵文写本奥書所出の梵文題名: *Abhidharmasamuccaya*。

(2) 漢訳の伝統では獅子覚に帰せられるが、チベット語訳の奥書では最勝子（*Jinaputra）に帰せられる。なお、van der Kuijp [2013: 1408] では、チベットの伝統において最勝子への寄託のみにとどまらないことを指摘する。

り、その欠を補うための漢訳とチベット語訳の価値はいまだ失われていない。本稿では、テキストとして梵文原典を提示し、漢訳、チベット語訳を添え、見開きの形で訳注を提示する。

先行研究

今回扱う箇所についての、漢訳およびチベット語訳を用いた先行研究としては、次のものがある。まず高崎直道 [1961] は、六義を論じる中で冒頭二偈をチベット文から英訳する。高崎正芳 [1964] は、『雑集論』冒頭偈のチベット語訳を和訳して漢訳との伝承の比較を行い、その部分が『集論』本文や釈文に見られないことを指摘しつつ詳細な解説を施す。続く同 [1971] は主にその著者問題に注目し、また同 [1978] でも、窺基の『阿毘達磨雜集論述記』（『雑集論述記』）を参照しながら、漢訳とチベット語訳における造論の目的に関する記述について考察を行う。それらを踏まえて岡田 [1992] は、冒頭偈における漢訳とチベット語訳の相違を丁寧に整理した上で、チベット語訳が孕む翻訳の成立と序文の作者に関する二点の問題を指摘し、チベット語訳は漢訳に比べて整合性に欠けるものであると結論づける。

冒頭偈の作者

今回扱う箇所は、冒頭の三偈とその自注とからなるが、冒頭偈の作者についてまず論じておきたい。結論を先取りすると、その作者は安慧本人と認められる。その主な根拠は、第三偈の内容である。同偈は梵本が欠損しているので、梵本に比較的忠実な漢訳をもとにした試訳を提示する。

（第三偈漢文和訳）

本論をはじめに述べられた師（無着）、および貴い教えを直接に授かって〔その〕注釈を造られたお方（獅子覚）に敬礼して、〔それら〕スートラとパーシャ（本文と釈文）を理解するために、いまここに、いそしんでまとめ合わせよう。

ここで、偈頌作者は、『集論』の本文（スートラ）作者と、その釈文（パーシャ）作者、すなわち無着と獅子覚に言及している。そして偈頌作者は、本文と釈文を「まとめ合わせ」た人物、すなわち下記の「会本」編者であるとも明言されている。

では会本編者は誰であろうか。『雑集論述記』によると、『雑集論』は、安慧が無着作の本論と獅子覚作の注釈を合糅し、それに自身の序文を付した作品とされる⁽³⁾。つまり本作品は、本来は別々に存在した無着の本文と獅子覚の釈文を、適宜並べ直した会本であり、その編者は安

⁽³⁾ 『雑集論述記』（卍統 [48] 1c）

大聖無著具廣慧悲、集阿毘達磨經所有宗要、括瑜伽師地論一切法門、敘此本文、演斯妙義。覺師子稟承先訓、更為後釋。安慧閑其本末、參糅兩文。

慧ということである。

以上の事実を踏まえると、第三偈は会本作者による作偈であることに疑いなく、その人物は、目下のところ、安慧以外の人物を想定する必然性はない。残念ながら新出の『雑集論』梵文写本に著者名は明記されていないが、安慧であることを妨げるものではない。

また第一、二偈に読み込まれている六義（自性、原因、結果、事業、相応、顕現）は、瑜伽行派に広く知られていた注釈方法である。本稿が扱う仏宝の六義の他、「帰依」、「清浄法界」、「仏陀の特質」などの概念を六義に基づき解釈する例が瑜伽行派の文献には多くみられる⁽⁴⁾。そして、『大乘莊嚴經論』に対する安慧の注釈でも、この六義に基づく注釈方法は踏襲されている。特に第 IX 章菩提品第 56 偈～59 偈では、六義に基づき「清浄法界」が解釈されている。これに対する安慧の注釈では、三種転依、三身説などを六義と関連させた上で「清浄法界」を注釈しており、この点は本稿が扱う冒頭偈と類似している⁽⁵⁾。

なお、冒頭三偈においては三宝帰依と、『集論』本文作者および釈文作者への帰敬、そして著作目的が記されるが、安慧の別のアビダルマ注釈書である『俱舍論実義疏』にも類似した構造をもつ冒頭偈が提示される⁽⁶⁾。

稽首薄伽衆徳山 稽首達磨大智海
 稽首僧伽和合衆 掣斯論主及吾師
 我將螢耀助陽光 隨力弘宣對法藏
 爲利群生法久住 願以威神見護持

アビダルマ論書の冒頭において、三宝帰依を提示することは、他の様々な論書にも確認されるため、安慧は伝統的な形式に則っていることが知られる⁽⁷⁾。そして本文作者と釈文作者へ帰

(4) 『大乘莊嚴經論』第 II 章帰依品第 11 偈、第 VII 章威力品第 1 偈～9 偈、第 IX 章菩提品第 56 偈～59 偈、第 XVI 章度脱品第 17 偈～18 偈、第 19 偈～20 偈、第 21 偈～22 偈、第 23 偈～24、第 25 偈～26 偈、第 27 偈～28 偈、XVIII 章覚分品第 74 偈～76 偈、第 XXI 章敬仏品第 60 偈～61 偈、『撰大乘論』第 X 章第 27 偈、ASBh §198、『仏地経論』などに見られる。

また、六義とその出典については、西尾 [1940: 273, n. 6]、高崎直道 [1961] [1975]、袴谷 [1976]、長尾 [1987: 383, n. 1] [2007: 241, n. 1]、内藤 [2013] に詳しい。このうち、上記で挙げた六義の出典に関して言えば、西尾 [1940] は『仏地経論』と同じ、法界を六義でもって注釈するものとして、『大乘莊嚴經論』と、それに対する安慧の注釈があることを指摘し、さらに仏の特徴を六義で注釈するものとして、『大乘莊嚴經論』第 XXI 章敬仏品の他、本稿で取り扱う『雑集論』の箇所を挙げる。長尾 [2007] は『大乘莊嚴經論』での出典箇所を、より具体的に挙げ、さらにその他の出典として、『撰大乘論』第 X 章第 27 偈、ASBh §198 を挙げる。また、高崎直道 [1961] は『宝性論』に見られる十義のうち、六義が『瑜伽論』(T 361a17-18)を含め、瑜伽行派の文献に多く見られることを指摘し、六義が瑜伽行派に由来するとの見解を示している(高崎直道 [1975] についても参照)。

(5) 『大乘莊嚴經論』第 IX 章の六義については上野 [2015: 82-108] に詳しい。

(6) T [29] 325a11-14。同書は『俱舍論』安慧注の漢訳抄本である。漢訳完本は断片のみ発見されており、漢訳からのウイグル語訳も漢訳第一巻対応部のみ残る。ウイグル語訳は上掲の冒頭偈を有しており、そこには第四句目「掣斯論主及吾師」に対して注記を加えており、「論主」を世親、「吾師」を徳慧に同定している(庄垣内 [1991: 22-23])。なお梵文写本および梵文からのチベット語訳は、冒頭偈対応箇所を欠いている。

(7) 『中辺分別論』の冒頭で世親は、弥勒と無着に対する帰敬偈を示している。当該偈の安慧注については、MAVT†

敬を示す点は、『瑜伽師地論』（『瑜伽論』）の「聞所成慧地決択」（T [30] 658a9-11）に次のように示されている。

復次若欲造論、當先歸禮二所敬師、方可造論。恭敬法故、先應歸禮論本大師。恭敬義故、復應歸禮開闡義師。

梵本について

梵本の詳細については李 [2011] を参照されたい。その要点のみ述べると、『雜集論』には漢訳とチベット語訳が残るが、その梵本はこれまで知られていなかった。李学竹は、罗炤氏の目録をもとに、中国藏学研究中心所蔵のマイクロフィルムの中に、ポタラ宮所蔵の同書の梵文写本を見出し、その翻刻を順次発表してきた。『雜集論』は、九割以上が、『集論』とその釈論とから構成されるが、本稿で扱う冒頭箇所は、そのいずれにも含まれない、新出の梵文資料である。そして上記のごとく漢訳の伝統に従うならば、その箇所は安慧が著した可能性が高い、貴重な資料である。

梵本欠損箇所について

本稿は梵文テキストの提示とその和訳を目指すのが、梵文写本の第一葉が欠損しているため、当該箇所を、漢訳とチベット語訳によって補う必要がある。欠損箇所は、テキストの冒頭箇所から、六義を解説する箇所までである。その中でテキストの冒頭では、三つの偈頌が掲げられるが、このうち前半二偈の半分以上は、梵本に残存する偈頌の解説箇所から抽出回収が可能であるため、その梵文テキストと和訳を挙げる。しかしそれ以外の、梵文が欠損する箇所は、漢訳とチベット語訳に依らざるを得ない。ところが、漢訳とチベット語訳を比較してみると、相互に異なっている箇所が少なくない。本稿は梵文和訳を目指すので、両者の中から、梵本に近いとみられる方を選択する必要がある。そこで、梵漢蔵三本が比較できる箇所を検討することによって、梵本に近いほうを検証する必要がある。結論から述べると、漢訳が梵本に近い。チベット語訳は、しばしば文意が破綻しており、使用に堪えない箇所が少なくない。したがって梵本欠損箇所は漢訳を底本と定めた。梵漢がよく対応し、チベット語訳が異なっている例、およびチベット語訳が破綻している例について、下記の梵漢蔵対照例を参照されたい。

なお『集論』とその釈論のチベット語訳は、9世紀頃イエーシェーデーとジナミトラによってなされたが、本稿で扱う冒頭箇所は、1300年前後にニマギェルツェンによって訳出され、追加されたものである（van der Kuijp [2013: 1409] 参照）。チベット語訳において論本体の訳

1.1-2.11 参照。

と冒頭部の訳とで、訳文の質が大きく異なっているのはそのためである。

梵漢蔵対照例

以下に、梵漢蔵を比較してチベット語訳の不備が顕著な例として2例のみを挙げる。

まず、梵漢がよく対応し、チベット語訳が異なっている例としては、六義中の第二義（本稿科段 II.2.2）が挙げられる。ここでは、梵本にて「仏陀の菩提」（*buddhabodhi*）とある箇所は、漢訳においても「佛菩提」と翻訳され、よく一致する。そして、この文は仏菩提がもたらされることを説明している。その一方で、チベット語訳の該当箇所では「菩薩たち」（*byang chub sems dpa' rnam*）となっている。これにしたがうならば、菩薩たちが生み出す（*nges par 'byung ba*）ということになり、生み出されるものが述べられていないことになってしまう。加えて、「仏陀の菩提」の代わりに「菩薩たち」とするチベット語訳の内容は、仏の六義（原因）を解説する当該の文脈を曖昧なものにしてしまう可能性がある。以上の点で、チベット語訳は採用し難い。

次に、チベット語訳が破綻している例としては、冒頭偈の注釈の末尾（本稿科段 II.3）が挙げられる。ここでは、梵本にて「それを学処として学ぶことから生み出されるものだから」（*tacchikṣāsīkṣaṇaniryātatvāc*）とあり、漢訳でも「僧寶者隨此修學所生故」と翻訳され対応が認められる。このように当該箇所は、僧宝に対しても讃嘆文が適用できる旨を述べる箇所である。しかし、チベット語訳では「それは有学と無学の所生であるから」（*de slob pa dang mi slob pa'i nges par 'byung ba'i phyir*）と、異なる形で翻訳する。おそらくこのチベット語訳は梵本の誤読である。梵本の「*śikṣāsīkṣaṇa-*」は「学処を学ぶこと」（*śikṣā-śikṣaṇa*）と理解すべき箇所であるが、チベット語訳者は *śikṣā-aśikṣaṇa* と理解してしまった可能性が考えられる。したがって、この場合もチベット語訳は採用し難い。

以上の梵漢蔵の対照例から、梵本と漢訳が内容の上でよく一致し、文脈の上からもより妥当な意味を示すことが知られる。一方で、チベット語訳がこの二本と異なる読みを示す箇所では、概して文脈上の問題が存する点が確認された。その他同種の例は時おり見られるため、チベット語訳と比較して、梵漢がよく一致すると指摘できるであろう。

凡例

本稿ではテキストと和訳を見開きで提示する。テキストは、梵文テキスト、および漢訳、チベット語訳を順に示す。ただし梵文テキストは欠損箇所があり、その場合は漢訳とチベット語訳のみ提示した。提示する梵文テキストは、李 [2012: 5-6] の提示する校訂テキストに従

う⁽⁸⁾。その中で使用した記号は、同校訂テキストに従う。すなわち丸括弧 () は、梵文写本に欠損しており校訂者が補った文字を示す。角括弧 [] は、梵文写本において不明瞭な文字を示す。三角 △ は、梵文およびチベット語訳における改行位置を示す。注は二種用いた。一つは、脚注で括弧を附した番号（例：⁽¹⁾ など）で表記した。もう一つは、附論の末注で括弧なしの番号（例：¹ など）で表記した。漢訳は大正新脩大蔵經のテキストにもとづき、チベット語訳はデルゲ版を底本として北京版と校合したテキストにもとづいた。和訳は、梵文テキストを底本とした梵文和訳である。梵文テキストが欠損する箇所については漢訳を底本とした。漢訳を底本とする根拠については上記に論じた通りである。

科段

I 冒頭偈

- I.1 三宝帰依（第一偈、第二偈）
- I.2 二師への帰依と造論意趣（第三偈）

II 自注

- II.1 総論（三宝帰依と二師供養）
- II.2 仏宝の六義
 - II.2.1 自性
 - II.2.2 原因
 - II.2.3 結果
 - II.2.4 事業
 - II.2.5 相応
 - II.2.6 顕現
 - II.2.6.1 受用身、変化身、自性身
- II.3 法宝と僧宝への六義の適用

⁽⁸⁾ ただし、第二偈 cd など還梵箇所は、他の可能性も想定しうるため省略した。

I 冒頭偈

I.1 三宝帰依（第一偈、第二偈）（回収梵文と諸訳）

【ASVy】 ASVy-Ms 欠葉⁽⁹⁾, D 117a6–7, P 143b3–4, T 694b19–24, Hayashima 7.

（梵文 a 句は未回収） caryāsāgarapāragah |
sarvadharmêśvaro 'cintyavinayôpāyanāyakaḥ || (1)

aprameyâdbhutaḡaṇaḥ svaparârthôbhayâśrayaḥ | (2ab)
（梵文 cd 句は未回収）

諸會眞淨究竟理 超聖行海昇彼岸
證得一切法自在 善權化導不思議

無量希有勝功德 自他並利所依止
敬禮如是大覺尊 無等妙法諸聖衆

P 143b4
rtogs pa nges gnas dri med don ||
gang spyod rgya mtsho'i pha rol gshegs ||
chos kun dbang phyug bsam mi khyab ||
△ 'dul ba'i thabs kyis 'dren pa can ||

D 117a7
gzhal med legs gyur yon tan ni ||
rang dang gzhan don gnyis la brten ||
sangs rgyas chos dang 'phags pa yi ||
tshogs la'ang de phyir phyag 'tshal lo ||

⁽⁹⁾ 回収梵文は後掲の自注にもとづく。本稿科段 II.2.2–II.2.6 参照。

冒頭偈

三宝帰依（第一偈、第二偈）（梵文和訳）

真如の諸々の会得を通じて、究極の道理を浄化し⁽⁰⁰⁾、
 海のごとき〔広範な〕諸々の行によって彼岸に到っており、
 一切法について自在であり、
 不可思議なる教化方法もって導くお方であり、
 無量の奇特なる徳性を持つお方であり、
 自利と利他とその両者との所依（受用身・変化身・自性身）である
 仏（大覺尊）に、そして法（無等妙法）⁽⁰¹⁾と僧（諸聖衆）⁽⁰²⁾とに帰命いたします。

⁽⁰⁰⁾ この第一偈 a 句については、写本の欠葉により梵文が回収できない。本稿では漢訳に基づき当該の訳を提示したが、チベット語訳では「確固たる汚れない対象を覚り」となっており、高崎正芳 [1964: 191] は「証悟が決定して無垢なる処が対象となっており」と翻訳する。また、漢訳は本文のように「諸の會眞もて究竟理を浄し」と理解した上で訳を提示したが、「諸の會眞、浄にして、理を究竟す（真如の諸々の会得が清まっております、道理を完成している〔お方であって〕）」とも理解されうる（『雜集論述記』 卅続 [48] 7b 参照）。従って、チベット語訳と漢訳との理解に相違があることも考慮しなければならないであろう。本稿科段 II.2.1 も参照されたい。高崎直道 [1961: 31] は、当該部分のチベット語訳の a 句の *nges gnas* を *des gnas* と読み（誤読か）、次のように英訳する。He is [by nature] the realization and the immaculate truth established by it. なお松田和信先生のご厚意により、桜部建、松田和信両先生による未発表の冒頭偈および自注の一部のチベット文和訳のノートを参考にさせて頂いた。

⁽⁰¹⁾ チベット語訳の「仏法 (*sangs rgyas chos*)」は、漢訳と文脈をふまえて「仏に、そして法」と理解できる。

⁽⁰²⁾ Tib.: 'phags pa yi tshogs. Cf. *āryasaṃgha: ŚrBh₁ 292, Hayashima 805.

I.2 二師への帰依と造論意趣（第三偈）（回収梵文と諸訳）

【ASVy】 ASVy-Ms 欠葉, D 117a7, P 143b4–5, T 694b23–24, Hayashima 7.

（梵文は未回収）

敬禮開演本論師 親承聖旨分別者
 由悟契經及解釋 爰發正勤乃參綜

P 143b5

mdo sde rnam par bshad pa'i tshig |
 bstan bcos gang gis⁽³⁾ yang dag bsdu ||
 rnam par dbye ba rnams kyang ste ||
 rtogs par dka' rnams yang dag dgrol ||

II 自注

II.1 総論（三宝帰依と二師供養）（回収梵文と諸訳）

【ASVy】 ASVy-Ms 欠葉, D 117b1, P 143b5–6, T 694b25–27, Hayashima 7.

（梵文は未回収）

今此頌中、無倒稱讚最勝功德、敬申頂禮、以供養三寶及造此論經釋二師、隨其所應。所以者何。此論所依及能起故。

D 117b1
P 143b6

△ tshigs su bcad pa 'di dag gis ni dkon mchog gsum gyi yon tan rgya cher △ bshad pa rnams
 nye bar bsdu te phyag mdzad pa dang | mdo sde'i rnam par bshad pa byed pa por mdzad
 de | ji ltar 'byung ba dang gang mdzad pa rnams bstan bcos gzhan gyi gnas de rnams kun
 nas btus pa'i phyir ro ||

⁽³⁾ gi P

二師への帰依と造論意趣（第三偈）（漢文和訳）¹⁴⁾

本論をはじめに述べられた師（無着）、
 および貴い教えを直接に授かって〔その〕注釈を造られたお方（獅子覚）に敬礼して、
 〔それら〕スートラとバーシャ（本文と釈文）を理解するために、
 いまここに、いそしんでまとめ合わせよう¹⁵⁾。

自注

総論（三宝帰依と二師供養）（漢文和訳）¹⁶⁾

この偈頌において〔私、安慧が〕、〔三宝の〕もっとも勝れた徳性 (guṇa) をあやまりなく称讃して、恭しく頂礼するに際して¹⁷⁾、まず三宝を、それから、この論のスートラとバーシャ（本文と釈文）を造られた二師（無着・獅子覚）を供養することは、理に合っている¹⁸⁾。なぜか。〔三宝と二師は適宜〕この論のよりどころ（所依）と作者（能起）〔にそれぞれ対応している〕からである。

¹⁴⁾ 藏文和訳：

スートラを解説する言葉を論書にまとめたお方（無着）と、
 注釈する方々（獅子覚等）とに、あわせて〔帰命し〕難解な〔論と釈論と〕を解明しよう。
 この「スートラ」の指す内容は、複数の解釈が可能である。第一に「経典」と理解した場合は、「経典を解説する言葉を論書にまとめた」と理解され、第二に『瑜伽論』と理解した場合は、『『瑜伽論』を解説する言葉を論書にまとめた』と理解される。そして、第三に、漢訳に基づき『『集論』本論』と理解した場合は、『『集論』本論を説き始める言葉を論書にまとめた』と理解される。

また、「スートラを解説する言葉を論書にまとめた」に関しては、「経典を解説する言葉 (Abhidharma) を論書にまとめた (samuccaya)」という解釈のもと、論書名を解説しているとも理解できる。

¹⁵⁾ 漢訳の「参綜」は「まとめる」の意。チベット訳の yang dag dgrol は「解明する」等の意。

¹⁶⁾ 藏文和訳：

これらの偈頌をもって、詳細に説明された (rgya cher bshad pa) 三宝の功德 (dkon mchog gsum gyi yon tan) をまとめてから (nye bar bsdu te) 帰命して、スートラの解説者 (mdo sde'i rnam par bshad pa byed pa po) ¹⁾ に〔帰命〕している。何故ならば、〔三宝が〕どのようにして生起するのかということと、著者たち (mdzad pa rnams) が、別の論書のよりどころ (bstan bcos gzhan gyi gnas) を、〔この三つの偈に〕集成している (kun nas btus pa, *samuccita) からである。

¹⁾ mdo sde'i rnam par bshad pa に関して、原文が Dvandva であった可能性も考えられる。例えば、dPal ldan Blo gros brtan pa はパーニニースートラ 1.4.52 の Dvandva を genitive 助辞で表現している。

yathā gatibuddhipratyavasānārthaśabdakarmākarmakāṇām aṇi kartā sa nāv ity atra | (PST I 114, 7-8)

ji ltar rtogs pa dang blo dang so sor zhen pa'i don gyi sgra las dang | las med pa rnams kyi aṇa la byed pa po de ṇi la'o zhes pa'di bzhin no || (PST I, D 52a1, P 58a7)

¹⁷⁾ 「敬申頂禮」はチベット語訳 phyag mdzad pa に対応。「敬申」は礼拝の意。八尾 [2013: 573]、T [24] 92c26 「恭敬申供養」参照。

¹⁸⁾ 「隨其所應」の原語としては、anvartha または yathāyogaṃなどを想定した。

(回収梵文と諸訳)

【ASVy】 ASVy-Ms 欠葉, D 117b2-4, P 143b7-144a2, T 694b27-c3, Hayashima 7.

(梵文は未回収)

佛薄伽梵是契經等一切教法平等所依。無師自悟諸法實性、一分教⁽⁹⁾起所依處故。從此無間聖弟子衆依法隨學。法爲依者法界所流故。經釋二師亦契如來所說正法一分、無倒聞思修行為依止故、隨而造論。

D 117b2
P 143b7 △ de la sangs rgyas bcom ldan 'das kyis mdo'i sde dang | dbyangs kyis bsnyad pa'i sde dang |
lung du bstan pa'i sde la soggs pa'i chos bstan pa kun la brten pa dang | slob dpon rang gis
P 143b8 chos kyi de kho na nyid mngon par rtogs pa bzhin de'i stobs kyis de ma thag par bstod
D 117b3 pa la rab tu zhugs te | de'i rnam pa 'dir bstan pas 'phags pa slob pa'i sde la gnas shing
P 144a1 phyir mi ldog pa'i chos kyi dbyings kyi gnas nyid kyi rgyu mthun pa'i phyir ro || mdo sde'i
rnam bshad mdzad pa dag gis bcom ldan 'das kyi che ba'i yon tan gyi chos gcig bstan na
D 117b4 'ang | blo chung ba rnam thos pa dang | bsam pa dang | bsgom pa'i rtogs⁽²⁰⁾ pa la brten
P 144a2 △ nas rjes su 'jug cing bstan bcos la spyod pa'i phyir ro ||

⁽⁹⁾ 一分教 『雜集論』：一切教 『成唯識論述記』(T [43] 233a2)

⁽²⁰⁾ rtog P

(漢文和訳)²¹⁾

仏・世尊は、經（スートラ）等の〔十二分教の〕あらゆる教えにとって、分けへだてのない依り所である。〔仏は〕師を持つことなく、諸法の真実（実性）を自ら悟り、あらゆる教え²²⁾（法）が生まれ出る依り所だからである。それから間を入れずに、聖者である弟子衆（僧）は、法に依って学び修行する（隨学）。〔弟子衆が〕法を依り所とするのは、〔法が〕法界から流れ出たもの（法界等流）だからである²³⁾。

本論（スートラ）の作者（無着）と釈論（パーシャ）の作者（獅子覺）である二師も、如来が説かれた正法の一部を理解し（契）、誤りのない聞思修の実践を依り所としているから、〔私、安慧は二師に〕随って論（『雜集論』）を造る。

²¹⁾ 藏文和訳：

そのうち、仏・世尊は、契經（*sūtra）と重頌（*geya）と授記（*vyākaraṇa）など¹⁾のあらゆる法の説示に
 にとっての依り所である。師（仏陀）が、自ら法の真実をありのままに現観なさった通りに、それによって、
 その直後に、稱讃に入る（bstod pa la rab tu zhugs）。そのあり様（*tadākāra）をここで説示すること
 によって、聖者である有学（slob pa）の衆（sde）に住して（gnas）退転することがない者にとっての法界
 （phyir mi ldog pa'i chos kyi dbyings）という依止（gnas nyid）より等流したもの（rgyu mthun pa）だ
 からである。何故ならば、經典の注釈の作者たちは、仏・世尊の偉大な功德の法の一部を説示しているが、
 智慧が劣っている者たちは、聞思修の〔三〕慧（rtogs pa）に依拠して、〔それに〕随って（rjes su 'jug）論
 書に従事する（spyod pa）からである。

¹⁾ 十二分教（十二部經）を指す。(1) 修多羅（sūtra 契經）、(2) 祇夜（geya 重頌）、(3) 和伽羅那（vyākaraṇa 授記）、(4) 伽陀（gāthā 孤起頌）、(5) 優陀那（udāna 無問自說）、(6) 尼陀那（nidāna 因緣）、(7) 阿波陀那（avadāna 譬喻）、(8) 伊帝目多伽（itivṛttaka 本事）、(9) 闍陀伽（jātaka 本生）、(10) 毘婆沙（vaipulya 方広）、(11) 阿浮陀達磨（adbhutatadharma 未曾有）、(12) 優婆提舍（upadeśa 論議）の十二。

²²⁾ 原文は「一分教」となっているが、それでは意味を取りにくい。内容に鑑みて「あらゆる教え」と翻訳した。また、この一節を引用する『成唯識論述記』（T [43] 233a2）では、「一切教」となっており、この理解を支持する。或いは、本来「一切教」であったとすれば、直後の「一分」との混同であろうか。

²³⁾ この文脈は所依（仏宝・法宝・僧宝）に関するものであり、仏宝が法宝の所依、法宝が僧宝の所依であることが明記されている。ただし、「諸法実性」或いは「法界」というものが、三宝と如何なる関係にあるかは検討の余地が残る。ここでは、『宝性論』（第 I 章 145 偈 dharmakāyo dvidhā jñeyo dharmadhātuḥ sunirmalaḥ | tanniṣyandaś ca gāmbhīryavaicitryanayadeśanā ||）等の解釈を踏まえて、法界は仏の法身である仏宝を意味すると理解し、最後の文は「それ（仏宝／法界／実性）から間を入れずに流れ出た法宝（法）を依りどころとする僧宝（弟子衆）」を意図していると理解した。

II.2 仏宝の六義 (回収梵文と諸訳)

【ASVy】 ASVy-Ms 欠葉, D 117b4–5, P 144a2–3, T 694c3–4, Hayashima 9.

(梵文は未回収)

初二頌顯示如來應正等覺勝德六義。所謂自性、因、果、業、相應、差別義。

de la dang po'i tshigs su bcad pa gnyis po⁽²⁴⁾ de dag gis ni bcom ldan 'das yang dag par
rdzogs pa'i sangs rgyas kyi don drug yongs su bstan te | rang gi ngo bo dang | rgyu dang |
'bras bu dang | phrin las dang | sbyor ba dang | 'jug pa rnam so ||

P 144a3
D 117b5

II.2.1 自性 (回収梵文と諸訳)

【ASVy】 ASVy-Ms 2r1 (李 [2012: 5.17–18]) , D 117b5–6, P 144a3–4, T 694c5–6, Hayashima 9.

△(pa)ridīpitaḥ | sarvākāratathatāśrayaparivṛttīlakṣaṇatvād buddhānām bhagavatām
dharmakāyasya ||

Ms 2r1

諸會眞淨究竟理者顯自性義。謂諸佛法身以一切種轉依眞如爲體性故。

de la re zhiḡ |⁽²⁵⁾ rtogs pa nges gnas dri med don ||⁽²⁶⁾ zhes bya⁽²⁷⁾ ba 'dis ni rang gi ngo bo
yongs su bstan te | sangs rgyas bcom ldan 'das kyi⁽²⁸⁾ chos kyi sku rnam pa thams cad⁽²⁹⁾
gnas pa la yongs su zhugs pa'i mtshan nyid kyi phyir ro ||

P 144a4
D 117b6

⁽²⁴⁾ *pos* P

⁽²⁵⁾ | *om.* P

⁽²⁶⁾ || *om.* P

⁽²⁷⁾ *bya om.* P

⁽²⁸⁾ *kyis* P

⁽²⁹⁾ *la add.* P

仏宝の六義 (漢文和訳)³⁰⁾

最初の二つの偈頌は、如来・応供・正等覚の勝れた徳性である六つの意味を説示している。すなわち、(1) 自性、(2) 原因、(3) 結果、(4) 事業、(5) 相応、(6) 顕現³¹⁾の意味である。

自性 (梵文和訳)

(1) 「真如の諸々の会得を通じて、究極の道理を浄化し³²⁾」というこ〔の句〕をもって、自性の意味が説示されている。何故ならば、諸仏・世尊¹⁾の法身は、あらゆる点での真如という所依³³⁾の転換³⁴⁾を特徴とするからである³⁵⁾。

³⁰⁾ 藏文和訳：

か〔の偈頌〕のうち、これら最初の二つの偈頌をもって、世尊・正等覚者の六つの意味を説示している。〔すなわち〕(1) 自性 (rang gi ngo bo)、(2) 原因 (rgyu)、(3) 結果 ('bras bu)、(4) 事業 (phrin las)、(5) 相応 (sbyor ba)、(6) 顕現 ('jug pa) である。

³¹⁾ 原語が *vr̥tti* であるため、内容に鑑みて「顕現」と翻訳した。漢訳が「差別」となっているのは、後述の「三身」の解説における *prabhedav̥rtti* という表現を前提にしている可能性がある。

³²⁾ 前半部は梵文が回収できないため、漢訳に基づき訳を提示した。チベット語訳では冒頭に「そのうちまず (de la re zhiḡ)」という文言があり、チベット語訳に基づく「確固たる汚れのない対象を覓り」となる。n.1 を参照せよ。

³³⁾ チベット語訳は「真如」(tathatā) を欠く。

³⁴⁾ この複合語の解釈は難解であり、「あらゆる点での真如の転依」と訳すことも可能である。下記の注を参照。

³⁵⁾ 『集論』釈文 (93.15–17) では、心転依、道転依、麁重転依が説かれる。その中、心転依は、本来清浄な心が遇来の随煩惱を離れることで起こるとし、さらにそれは *tathatāpariv̥rtti* だとしている。さらに菩薩の三種の称讃功徳を説く箇所 (116.1–6) には「所知障を断じる所依の転換に包摂される法身」(*dharmakāyasya jñeyāvaranāprahāṇāśrayapariv̥rttisamgrhītasya*) と言われ、「慳という法性」を説く際には (156.9–10) 「真如という所依の転換を現前となす」(*tathatāśrayapariv̥rttisākṣātkaraṇāt*) と説かれる。

このような論説は『中辺分別論釈疏』にも見られる。第 II 章「障品」では、十能作に関連して、菩提とは *āśrayaparāv̥rtti* であり、さらに *āśraya* とは無垢なる真如だとする (MAVṬ 84.21–22, ad II.10ab)。また MAVṬ 84.21: n. 4 も参照)。同じく、第 III 章「真実品」では、*ekāntanirmalatathatāśrayaparāv̥rttilakṣaṇam* (MAVṬ 125.19–20, ad III.11ab) とあり、佐久間 [2001] では複合語 *tathatāśraya* を「真如という所依」と理解している。

また、*sarvākāra* については、『中辺分別論釈疏』第 II 章「障品」において法身との関係が示される。すなわち菩薩十地の第三発光地を注釈して「法界の流れである経などの教示の法は、一切の点で清浄な法身と呼ばれる法界によって生じる」と説かれている (MAVṬ 101.10–18, ad II.14b)。つまり *sarvākāra* には、「一切の点で清浄である」という意味が込められているとも想定し得る。

II.2.2 原因 (回収梵文と諸訳)

【ASVy】 ASVy-Ms 2r1–2 (李 [2012: 5.19–20]), D 117b6–7, P 144a4–5, T 694c6–9, Hayashima 9.

Ms 2r2 **caryāsāgarapāraga** ity anena hetvarthaḥ | sarvākārapramuditâdidaśabhūmi-
caryâna(ṅtaka)ḥ[lpâ]saṃkhyakālaparibhāvanāhetuniryātātvd buddhabodheḥ ||

超聖行海昇彼岸者顯因義。謂佛菩提從一切種極喜等十地聖行無量無數大劫圓滿修習因所生故。

P 144a5 gang spyod rgya mtsho'i pha rol gshegs ||⁽³⁶⁾ zhes pa 'dis ni rgyu'i don te | byang chub sems
D 117b7 dpa' rnams kyis rab tu dga' ba ḥa sogs pa'i sa bcu'i spyod pa rnam pa thams cad pa mtha'
yas pa dus bskal ba grangs med par yongs su goms pa'i rgyus nges par 'byung ḥa'i phyir
ro ||

II.2.3 結果 (回収梵文と諸訳)

【ASVy】 ASVy-Ms 2r2–3 (李 [2012: 5.21–22]), D 117b7–118a1, P 144a5–6, T 694c9–11, Hayashima 9.

Ms 2r3 **sarvadharmêśvara** ity anena phalārthaḥ | prahīṇasavāsanakleśajñeyāvараṇānantâ[d]bhuta-
gūṇânuttarasambo(dhiphalâ)ḥ[ptyā] sarvadharmavaśavartitvāt ||

證得一切法自在者顯果義。謂永斷一切煩惱障所知障及彼餘習。證得無邊希有功德無上三菩提
果、於一切法自在轉故。

P 144a6 chos kun dbang phyug ces pa 'dis ni 'bras bu'i don te | nyon ḥa mongs pa dang | shes bya'i
D 118a1 sgrib pa bag chags dang bcas pa mtha' yas pa bcom pa'i phyir dang ⁽³⁷⁾ yon tan bla na med
par gyur ba'i rdzogs pa'i byang chub kyi 'bras bu thob pa na ⁽³⁸⁾ chos kun la dbang sgyur
ba'i ⁽³⁹⁾ phyir ro ||

⁽³⁶⁾ || om. P

⁽³⁷⁾ | add. P

⁽³⁸⁾ ni P

⁽³⁹⁾ | add. P

原因（梵文和訳）

(2) 「海のごとき〔広範な〕諸々の行によって彼岸に到っており」というこ〔の句〕をもって、原因の意味が〔説示されている〕。仏陀の菩提は、あらゆる種類の、歓喜などの十地の行を²、無限の劫、無数の時間にわたって⁴⁰、反復修習するという原因より生み出されるものだからである。

結果（梵文和訳）

(3) 「一切法について自在であり」というこ〔の句〕をもって、結果の意味が〔説示されている〕。〔仏・世尊は〕煩惱障と所知障を習気もろとも断じており³、無限かつ希有なる功德を有する無上等覚という結果を得ることにより、一切法について自在であるからである。

⁴⁰ 本文では *anantakalpa* と *asaṃkhyakāla* からなる二つの部分と理解した。この理解は『雑集論述記』が「劫謂時分」と釈する点からも支持される。一方、*anantakalpa-asaṃkhyakāla* を「限りない阿僧祇〔大〕劫なる時間」と理解することも可能である。『雑集論述記』（卍統 [48] 10c12–15）参照。

II.2.4 事業 (回収梵文と諸訳)

【ASVy】 ASVy-Ms 2r3-4 (李 [2012: 5.23-25]) , D 118a1-2, P 144a7-8, T 694c11-14, Hayashima 9.

Ms 2r4

acintyavinayôpāyanāyaka ity anena karmârthaḥ | asarvajñātyatītaviṣaya[rddhy-
ā]deśanānuśāsan[ā]prātihāryādyaparimi(tavinayô)ḥpāyair vineyasattve cittadhātu-
pariśuddhinayanāt ||

善權化導不思議者顯業義。謂以超非一切智境神通記說教誠變現等無量調伏方便導引可化有情心界清淨故。

P 144a7

bsam_△ mi khyab⁽⁴¹⁾ 'dul ba'i thabs kyis 'dren pa can ||⁽⁴²⁾ zhes pa 'dis ni phrin⁽⁴³⁾ las kyi don
te | kun shes pas 'das pa'i yul kun brjod pa dang | rdzu 'phrul dang⁽⁴⁴⁾ rjes su bstan pa'i
cho 'phrul la sogs pa dpag tu med pa⁽⁴⁵⁾ 'dul ba'i thabs kyis btul_△ te | sems can gyi sems
kyi khams yongs su dag par 'dul ba'i phyir ro ||

P 144a8
D 118a2

II.2.5 相応 (回収梵文と諸訳)

【ASVy】 ASVy-Ms 2r4-5 (李 [2012: 5.26-27]) , D 118a2-3, P 144a8-b1, T 694c14-17, Hayashima 9.

Ms 2r5

aprameyâdbhutagaṇa ity anena yogârthaḥ | tarkasaṃkhyâtikrāntaparāhitâdhānāneka-
duṣkaraniryātānu(ttaramahāka)ḥruṇābalavaiśāradyâdidharmaratnayogāt ||

無量希有勝功德者顯相應義。謂超尋思數量無邊種種難行苦行所生無上大悲力無畏等功德法寶相應故。

P 144b1

gzhal med legs gyur yon tan ni ||⁽⁴⁶⁾ zhes pa 'dis ni sbyor ba'i don te | rtog pa dang dpyod
pa las shin tu_△ 'das pa yongs su phan pa'i rnam pa ma lus pas dka' ba spyod pa'i nges par
D 118a3 'byung ba dang | bla na_△ med pa'i snying rje chen po dang | stobs dang⁽⁴⁷⁾ mi 'jigs pa la
sogs pa'i chos dkon mchog la sbyor ba'i phyir ro ||

⁽⁴¹⁾ | om. P

⁽⁴²⁾ || om. P

⁽⁴³⁾ 'phrin P

⁽⁴⁴⁾ | om. P

⁽⁴⁵⁾ pa'i P

⁽⁴⁶⁾ || om. P

⁽⁴⁷⁾ | om. P

事業（梵文和訳）

(4) 「不可思議なる教化方法をもって導くお方」というこ〔の句〕をもって事業の意味が〔説示されている〕。〔仏・世尊は〕一切智者でない者達の領域を超えた、神変示導・記説示導・教誡示導⁽⁴⁸⁾を始めとする無量の教化方法をもって、教化されるべき有情を相手に、心の本質（心界）を清浄に導くからである。

相応（梵文和訳）

(5) 「無量の奇特なる徳性を持つお方」というこ〔の句〕によって、相応の意味が〔説示されている〕。〔仏・世尊は〕論理と数を超越しており、利他の基盤である、数多くの難行⁴に由来する無上の大悲・〔十〕力・〔四〕無所畏などの宝のような性質（dharma）^{(49), 5}と相応するからである。

⁽⁴⁸⁾ 三示導（三輪）のことを指す。AKBh 424、櫻部他 [2004: 180-182] 参照。

⁽⁴⁹⁾ dharmaratna という表現のみを切り出すならば「法宝」を意味すると理解されうるが、ここでは仏宝の内容を説明しているので、「宝のような仏の性質」と理解した。

II.2.6 顕現

【ASVy】 ASVy-Ms 2r5–v1 (李 [2012: 6.1–4]), D 118a3–5, P 144b1–4, T 694c17–20, Hayashima 9, 11.

Ms 2r6 **svaparārthôbhayâśraya** ity anena vṛttyarthaḥ | svaparārthôbhayâśrayalakṣaṇatvāt
 sām̐bhogikanairmāṇikasvābhā(vikānām̐ tathā)gatakāyānām̐⁵⁰ yathākramam | svārtha-
 pradhāna āśrayaḥ svārthâśrayaḥ | āśraya iti kāyaḥ śarīram ity anarthhântaram | evam
 Ms 2v1 parārthapradhāna āśrayaḥ (parārthâśrayaḥ |) ubhayapradhāna āśraya ubha(yâśra)ya⁵¹
 iti carcitavyam |

自他並利所依止者顯差別義。謂如來受用變化自性身如其次第自他並利所依故。所依者身義體義無差別也。自他並利所依者就勝而說。

P 144b2 rang dang gzhan don gnyis la brten ||⁵² zhes pa 'dis ni 'jug pa'i don te | rang dang gzhan
 D 118a4 gyi don gnyis la gnas pa'i mtshan nyid kyi phyir dang | longs spyod rdzogs pa'i sku dang |
 P 144b3 sprul pa'i sku dang | ngo bo nyid kyi de bzhin gshegs pa'i sku rnams ji ltar rigs par rang
 don gtso che ba la brten pa dang | mtha' yas pa'i gzhan don gtso che ba nyid la brten
 pa'o || brten zhes pa ni sku ston zhes pa'i don te | gnyis la brten zhes pa ni gtso cher
 P 144b4 D 118a5 spyad par bya ba ste |

⁵⁰ -svābhā(vikānām̐ tathā)gata- em. (Cf. ASVy-Ms 2v1: sām̐bhogikaḥ kāyo) : -svābhā(vikatathā)gata-
 李 [2012]

⁵¹ ubha(yâśra)ya em. (Cf. Tib.: gnyis la brten) : ubha(yārthâśraya) 李 [2012]

⁵² || om. P

顕現

(6) 「自利と利他とその両者との所依（受用身・変化身・自性身）である」というこ〔の句〕によって顕現の意味が〔説示されている〕。受用と変化と自性との如来身は、順次、自利と利他とその両者にとっての所依であることを特徴としているからである⁶。「自利の所依」とは、自利が主要となる所依である。「所依 (āśraya)」は、身体 (kāya)、からだ (śarīra) と別なものを意味するのではない。同様に「利他の所依」とは、利他が主要となる所依である。「両者の所依」とは、〔自利と利他との〕両者が主要となる所依である、というように〔個別に同様の語義分析が〕繰り返して説かれるべきである。

II.2.6.1 受用身、變化身、自性身（回収梵文と諸訳）

【ASVy】 ASVy-Ms 2v1-3（李 [2012: 6.5-10]）, D 118a5-7, P 144b4-7, T 694c20-26, Hayashima 11.

sāmbhogikaḥ kāyo buddhānām svārthapradhānaḥ | mahāparśanmaṇḍaleṣu teṣu tena
paramôdāragambhīradharmasambhogapratyanubhavanāt |

Ms 2v2 nairmānikaḥ parārthapradhānaḥ | tena daśasu dikṣu lok(adhātuṣu sarveṣu) yathāpraty-
ekam śilpakarmādinirmāṇaiḥ sattvakṛtyānuṣṭhānāt |

Ms 2v3 svābhāvikaḥ kāyaḥ sarvasugatasādhāraṇaḥ paramasūkṣmaḥ sarvāvaraṇatathatāśraya-
parivṛttilakṣaṇ[o] (dharmakāyaḥ) svaparārthapradhānaḥ | tatprāptyêtarakāyalābhāt |
iyam trividhā tathāgatakāyaprabhedavṛttih |

謂受用身自利最勝。處大會中能受第一廣大甚深法聖財故。

變化身者他利最勝。遍於十方一切世界能起無間猶工巧業等諸變化事建立有情所應作故。

自性身者謂諸善逝共有法身最極微細。一切障轉依真如為體故。於自他利並為最勝。由證此身得餘身故。此三佛身是差別義。

longs spyod rdzogs pa'i sku ni sangs rgyas rnams kyi rang don gtso che⁽⁵³⁾ ba⁽⁵⁴⁾ ste | 'khor
gyi dkyil 'khor chen po rnams su nges yongs su dgyes par zab mo'i chos kyi longs spyod
so sor rjes su myong ba'i phyir ro |⁽⁵⁵⁾

P 144b5
D 118a6 gzhan don gtso che ba des phyogs bcu'i 'jig rten gyi khams thams cad du so so ji lta bar
rang nyid bzo'i las la sogs pa'i sprul pa rnams kyis sems can gyi bya ba kun bsgrub pa'i
P 144b6 phyir ro ||

ngo bo nyid kyi sku de bzhin gshegs pa kun dang thun mong ba shin tu phra ba'i sgrib⁽⁵⁶⁾
D 118a7 pa thams cad de bzhin nyid kyi gnas su yongs su sgyur ba'i mtshan nyid chos kyi sku
P 144b7 rang don gtso che ba ma thob pa thob par byed pa zhes bya ba⁽⁵⁷⁾ la sogs pa⁽⁵⁸⁾ de bzhin
gshegs pa'i sku'i dbye ba rnam pa gsum la 'jug par byed do ||

⁵³ che om. P

⁵⁴ bo P

⁵⁵ || P

⁵⁶ bsgrib P

⁵⁷ zhes bya ba om. P

⁵⁸ | om. D

受用身、變化身、自性身（梵文和訳）⁶⁰

諸仏⁷の受用身は、自利が主要となるものである。何故ならば、かの大会衆において、それ（身体）によって、極めて広大甚深なる法⁶⁰の受用⁸を内的に経験するからである⁶⁰。

変化〔身〕は、利他が主要となるものである。それ（身体）によって、十方の一切の世界において、各々に応じて⁹、技芸業など⁶²の諸々の化現（nirmāṇa）を通して、有情に対して為すべきことを遂行するからである。

自性身は、一切の善逝に共通するものであり、極めて微細なものであり、障碍全てに関する、真如という所依の転換⁶³を特徴とする法身であり、自利と利他を主要とするものである。何故ならば、それ（自性身）を体得することによって、他の身体（受用身と變化身）を獲得するからである。如来の身体の区別の顕現は以上のように三種である。

⁶⁰ 藏文和訳：

受用身は、諸仏にとって、自利を主要とするものである。何故ならば、〔かの〕大会衆の中において、満足しうる（yongs su dgyes pa）甚深（zab mo）な法の受用を各々享受するからである。

利他を主要とするそ〔の變化身〕は、十方の一切の世界において、各々に応じて、技芸業などの諸々の化現を通して、有情に対して為すべきことを遂行するからである。

自性身は、一切の如来に共通するものであり、極めて微細な障碍全てを真如の所依に転換していることを特徴とする法身であり、自利を主要とするものである。未だ得ていないものを獲得させる云々。〔以上のように〕如来の身体の区別は三種に顕現する。

⁶¹ ここでの「法」は、説法の意味ではなく、悟りの内容を示し、その悟りの内容を個人的に経験することを示す。

⁶² Cf. MSABh, IX ad k. 60: sāṃbhogiko yena paṇṣanmaṇḍaleṣu dharmasāṃbhogaṃ karoti |

⁶³ Cf. MSA, VII k. 6, IX k. 64.

⁶⁴ 「障碍全てに関する、真如の転依」とも訳せる。障碍からの転換という意味で、有垢真如から無垢真如への所依の転換を意図するものとして理解した。

II.3 法宝と僧宝への六義の適用 (回収梵文と諸訳)

【ASVy】 ASVy-Ms 2v3-4 (李 [2012: 6.10-12]), D 118a7-b1, P 144b7-145a1, T 694c27-29, Hayashima 1.

Ms 2v4

idam eva ca stotraṃ dharmasaṃghaṅḡākhyaṅānam api veditavyam | svabhāva-
he(tuphalādyarthasaṃ)gṛhītātṡvād dharmaratnasya tacchikṡṡāsīkṡṡaṅḡaniryātātṡvāc ca
saṅgharatnasyēti |
tatrādītaḡ śāstraśarīraṃ vyavasthāpyate śīṡyāvīṡādārtham |

當知此中亦讚法僧功德。法寶者自性因果等義所攝故。僧寶者隨此修學所生故。
庶令學者無諸怖畏、方造論端建茲體性。

P 144b8
D 118b1

bstod pa 'di nyid kyis chos dang | dge 'dun gyi yon tan kyang bshad par rig par bya ste |
rang gi_ngo bo dang | rgyu dang | 'bras bu'i_don bzung nas chos dkon mchog gi'o || de
slob pa dang | mi slob pa'i nges par 'byung ba'i phyir dge 'dun dkon mchog gi'o ||
P 145a1 slob ma rnams kyis rtogs sla ba'i don du bstan_bcos kyi lus rnam par gzhaḡ⁽⁶⁴⁾ pa'an mdzad
de |

⁶⁴ *bzhag* P

法宝と僧宝への六義の適用 (梵文和訳)

そして、他ならぬこの讃頌は、法〔宝〕と僧〔宝〕の功德をも説示していると理解されるべきである。何故ならば、法宝は自性、原因、結果などの意味に含まれるからであり、僧宝はそれ(六義)を学処として学ぶこと⁶⁵⁾から生み出されるものだからである。

さて、まず弟子たちを安心させるために、論書の骨格が〔無着先生によって〕規定される⁶⁶⁾。(以下、『集論』本論における総綱領偈につながる。)

⁶⁵⁾ この śikṣāśikṣaṇa という表現は、同族目的語による表現であり、「それを学習修行すること」ほどの意味であるが、直訳した。

⁶⁶⁾ この末尾の一文は、安慧の冒頭偈とその自注が終了したあとに、無着による『集論』本論の冒頭を導入するために説かれたものである。したがって厳密に言えば、本来は科段を分けることが望ましい。ただしいっぽうで、安慧の文言のみを対象に科段を立てる場合、本一文の内容は、必ずしも冒頭偈や自注と並べて別立てする必要がある程のものでもないことから、本稿では煩を避ける意味で敢えて科段を分けていない。

附論 『阿毘達磨雜集論』 梵本に対する漢訳表現の一例

本稿で扱った範囲の漢訳は比較的よく梵本と一致する。一見したところ梵本と異なる読みに見受けられる箇所も、吟味してみるとそれらは原語が必ずしも異なるとは言えない。このことは、梵文欠損箇所に関して漢訳を底本とした本稿の方針を裏付けることにもなる。以下に、その特徴的な例を挙げる。

- 1 *buddhānāṃ bhagavatāṃ dharmakāyaśya* : 『雑集論』 (T [31] 694c5: 謂諸佛法身).
- 2 *daśabhūmicaryā* : 『雑集論』 (T [31] 694c8: 十地聖行).
- 3 *kleśa* : 『雑集論』 (T [31] 694c9–10: 一切煩惱).
- 4 *anekaduṣkara* : 『雑集論』 (T [31] 694c16: 種種難行苦行).
- 5 *dharmā* : 功德法 『雑集論』 (T [31] 694c16: 無上大悲力無畏等功德法實相應故).
- 6 *svaparāthobhayāśrayalakṣaṇatvāt* : 『雑集論』 (T [31] 694c18–19: 自他並利所依故).
- 7 *sāṃbhogikaḥ kāyo buddhānāṃ svārthapradhānaḥ* : 『雑集論』 (T [31] 694c20: 謂受用身自利最勝).
- 8 *dharmasāṃbhoga* : 法聖財 『雑集論』 (T [31] 694c21: 能受第一廣大甚深法聖財故).
- 9 *yathāpratyekam* : 能起無間 『雑集論』 (T [31] 694c22–23: 能起無間。猶工巧業等諸變化事).

略号および参考文献一覧

Ch.	Chinese translation
D	sDe dge edition of the Tibetan Tripiṭaka
em.	emended
Hayashima	早島本 (『梵藏漢対校 E-text 『大乘阿毘達磨雜集論』・『大乘阿毘達磨雜集論』), See AS.
ins.	insert(s)
Ms	Manuscript
om.	omitted in
P	Peking edition of the Tibetan Tripiṭaka
T	大正新脩大藏經
Tib.	Tibetan translation
卍統	新纂大日本統藏經 (卍統藏經)

一次資料

梵文およびチベット語訳

AKBh	<i>Abhidharmakośa-bhāṣya</i> . ed. by P. Pradhan, <i>Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu</i> , Tibetan Sanskrit Works Series 8, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.
AKTA	* <i>Abhidharmakośaṭīkā Tattvārthā</i> . Tib. D (4421), P (5875).
AKVy	<i>Abhidharmakośa-vyākhyā</i> . ed. by U. Wogihara, <i>Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā by Yaśomitra</i> , Tokyo: Sankibo Buddhist Book Store, 1989. Reprint (First edition: Tokyo: The Publishing Association of the <i>Abhidharma-kośa-vyākhyā</i> , 1932–1936).
AS(-Ms)	<i>Abhidharmasamuccaya</i> . ed. by V. V. Gokhale, “Fragments from the <i>Abhidharma-samuccaya</i> of Asaṅga,” <i>Journal of the Royal Asiatic Society</i> , Bombay Branch, New Series 23 (1947), pp. 13–38.

- 早島 理 『梵藏漢対校 E-text 『大乘阿毘達磨集論』・『大乘阿毘達磨雜集論』』 3 卷, 滋賀: 瑜伽行思想研究会 (<http://www.shiga-med.ac.jp/public/yugagy/AS.html>), 2003.
Cf. ed. by P. Pradhan, *Abhidharma Samuccaya of Asanga*, Visva-Bharati Studies 12, Santiniketan: Visva-Bharati, 1950.
(For the Sanskrit manuscript, see 李 [2011] , Li [2013] [2014] [2015] , Li & Kano [2014] .)
- ASBh(-Ms) *Abhidharmasamuccaya-bhāṣya*. ed. by N. Tatia, *Abhidharmasamuccaya-bhāṣyam*, Tibetan Sanskrit Works Series 17, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1976.
See also AS (早島).
(For the Sanskrit manuscript, see Li [2015] , 佐久間 [1996] .)
- ASVy(-Ms) *Abhidharmasamuccaya-vyākhyā*. Tib. D (4054), P (5555).
See also AS (早島).
(For the Sanskrit manuscript, see 李 [2011] [2012] , Li [2015] , Li & Kano [2014] .)
- MAVṬ *Madhyāntavibhāga-ṭīkā*. ed. by S. Yamaguchi, *Madhyāntavibhāgaṭīkā*, 名古屋: 破塵閣, 1934 (repr. 東京: 鈴木学術財団, 1966).
- MSA *Mahāyānasūtrālamkāra*. See MSABh.
- MSABh *Mahāyānasūtrālamkāra-bhāṣya*. ed. by S. Lévi, *exposé de la doctrine du Grand Véhicule selon le système Yogācāra*, tome I, Paris: Librairie Ancienne Honoré Champion, 1907 (repr. Kyoto: Rinsen Book Co., 1983).
- PST *Pramāṇasamuccaya-ṭīkā*. ed. by Ernst Steinkellner, Helmut Krasser and Horst Lasic, *Jinendrabuddhi's Viśālmālavatī Pramāṇasamuccayaṭīkā Chapter 1, Part I: Critical Edition*, Beijing: China Tibetology publishing house; Vienna: Austrian Academy of Sciences Press, 2005.
- YBh *Yogācārabhūmi*. ed. by V. Bhattacharya, *The Yogācārabhūmi of Ācārya Asaṅga: the Sanskrit text compared with the Tibetan version*, part 1, Calcutta: The University of Calcutta, 1957.
- ŚrBh₁ *Śrāvakabhūmi*. 1=声聞地研究会 『瑜伽論 声聞地 第一瑜伽処 —サンスクリット語テキストと和訳—』 大正大学総合佛教研究所研究叢書 第 4 卷, 東京: 山喜房佛書林, 1998.

漢訳および中国撰述文献

- | | |
|----------|---------------------------------------|
| 『俱舍論実義疏』 | 『俱舍論実義疏』安慧造, 失訳. T [29] (1561). |
| 『瑜伽論』 | 『瑜伽師地論』弥勒菩薩説, 玄奘訳. T [30] (1579). |
| 『集論』 | 『大乘阿毘達磨集論』無着菩薩造, 玄奘訳. T [31] (1605). |
| 『雜集論』 | 『大乘阿毘達磨雜集論』安慧菩薩糝, 玄奘訳. T [31] (1606). |
| 『成唯識論述記』 | 『成唯識論述記』窺基撰. T [43] (1830). |
| 『雜集論述記』 | 『大乘阿毘達磨雜集論述記』窺基撰. 卍統 [48] (796). |

二次資料

- Li, Xuezhu 李 学竹
 [2011] 「*Abhidharmasamuccaya* およびその注釈 (*Vyākhyā*) の新出梵文写本について」『印度学仏教学研究』60-1, pp. 153–156.
 [2012] 「*Abhidharmasamuccayavyākhyā* の序文について」『インド学チベット学研究』16, pp. 1–6.
 [2013] “Diplomatic Transcription of Newly Available Leaves from Asaṅga’s *Abhidharmasamuccaya* —Folios 1, 15, 18, 23, 24—,” *Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhism at Soka University* Vol. XVI, pp. 241–253.
 [2014] “Diplomatic Transcription of Newly Available Leaves from Asaṅga’s *Abhidharmasamuccaya* —Folios 29, 33, 39, 43, 44—,” *Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhism at Soka University* Vol. XVII, pp. 195–205.
 [2015] “Diplomatic Transcription of the Sanskrit Manuscript of the *Abhidharmasamuccaya-vyākhyā* —Folios 2v4–8v4—,” *Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhism at Soka University* Vol. XVIII, pp. 275–283.
- Li, Xuezhu 李 学竹 & Kano, Kazuo 加納 和雄
 [2014] “Restoration of Sanskrit text in missing leaves (fols. 2, 6, 7) of the *Abhidharmasamuccaya* manuscript on the basis of the *Abhidharmasamuccayavyākhyā* manuscript,” *China Tibetology* 23, pp. 53–63.
- van der Kuijp, Leonard W. J.
 [2013] “Notes on Jñānamitra’s Commentary on the *Abhidharmasamuccaya*,” *The Foundation of Yoga Practitioners: The Buddhist Yogācārabhūmi Treatise and Its Adaptation in India, East Asia, and Tibet*, ed. U. T. Kragh (Cambridge: Harvard University Press), Harvard Oriental Series Vol. LXXV, pp. 1388–1429.
- 上野 隆平
 [2015] 『『大乘莊嚴經論』の阿陀観 —Pratiṣṭhādhikāra (基盤の章)の研究—』(龍谷大学学位請求論文)。
- 岡田 繁穂
 [1992] 『『阿毘達磨雜集論』序文チベット訳考』『印度学仏教学研究』40-2, pp. 173–177.
- 佐久間 秀範
 [1996] 『タティア校訂版『阿毘達磨雜集論』梵語索引およびコリゲンダ』山喜房佛書林, 東京。
 [2001] 「*Madhyāntavibhāga-tīkā* における転依思想」『石上善應教授古稀記念論文集 仏教文化の基調と展開』山喜房佛書林, 東京, pp. 109–136.
- 櫻部 建・小谷 信千代・本庄 良文
 [2004] 『俱舍論の原典研究 智品・定品』大蔵出版, 東京。
- 篠田 正成
 [1970] 「*Abhidharmasamuccayabhāṣya* の成立年代」『印度学仏教学研究』18-2, pp. 437–441.
- 庄垣内 正弘
 [1991] 『古代ウイグル文 阿毘達磨俱舍論実義疏の研究 I』松香堂, 京都。
- 高崎 直道
 [1961] “Description of the Ultimate Reality by Means of the Six Categories in Mahāyāna Buddhism,” 『印度学仏教学研究』9-2, pp. 24–33.
 [1975] 「法身の一元論 —如来蔵思想の法観念」『仏教における法の研究 平川彰博士還暦記念論集』春秋社, 東京, pp. 221–240.

- 高崎 正芳
 [1956] 「無著・阿毘達磨雜集論について」『大谷学報』36-2, pp. 33-46.
 [1964] 「雜集論に於ける藏・漢両所伝」『禅学研究』54, pp. 189-198.
 [1971] 「大乘阿毘達磨雜集論の漢藏伝承について」『印度学仏教学研究』19-2, pp. 24-27.
 [1978] 「『大乘阿毘達磨雜集論』の一二の問題について」『印度学仏教学研究』27-1, pp. 58-63.
 [1987] 「マートリチェータの三宝讃と最勝子の三宝讃注」『花園大学研究紀要』18, pp. 1-30.
- 内藤 昭文
 [2013] 「『大乘莊嚴經論』の構成と構造：二つのウッダーナ (MSA X.1 & XV.1) の理解を踏まえて」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』52, pp. 3-29.
- 長尾 雅人
 [1987] 『撰大乘論 和訳と注解 下』講談社, 東京.
 [2007] 『『大乘莊嚴經論』和訳と注解 — 長尾雅人研究ノート (1) —』長尾文庫, 京都.
- 西尾 京雄
 [1940] 『仏地經論之研究』破塵閣書房 red, 名古屋.
- 袴谷 憲昭
 [1976] 「〈清浄法界〉考」『南都仏教』37, pp. 1-28.
 [1984] 「〈法身〉覚え書」『インド古典研究』6, pp. 57-80.
- 八尾 史
 [2013] 『根本説一切有部薬事』連合出版, 東京.

Annotated Japanese Translation of the Sanskrit Text of the
Abhidharmasamuccayavyākhyā:
 Sthiramati's Opening Verses

Summary

This paper presents an annotated Japanese translation of the opening portion of the *Abhidharmasamuccayavyākhyā* (or the *Dasheng apidamo zajilun* 大乘阿毘達磨雜集論). In this work Sthiramati collates Asaṅga's root text with *Sīṃhabuddhi's commentary and adds the opening portion by his own hand. The Sanskrit original of this opening portion was recently published by Li Xuezhong and is a very valuable material that contains Sthiramati's own doctrinal position.

This opening portion consists of three verses and auto-commentary of the verses. The verses first express dedication to the Three Jewels as well as to the author and commentator of the text (i.e. Asaṅga and *Sīṃhabuddhi), and then, clarify the motivation of composing the present text. Explaining the verses, the auto-commentary elaborates the Jewel of the Buddha as consisting six characteristics: *svabhāva*, *hetu*, *phala*, *karman*, *yoga*, and *ṛtti*; a set of hermeneutic notion widely known to Yogācāra authors.

Our translation is basically based on the Sanskrit text. Due to the lack of the first folio of the Sanskrit manuscript, the beginning part of the Sanskrit text is missing, and the translation of this missing part is based on the Chinese text. As for the opening portion in general, the Chinese text is precise and close to the Sanskrit original, whereas the Tibetan text sometimes contains serious corruptions. We thus utilize the Chinese text as the secondary witness for our translation.

- Leader: Yoshihiko Nasu (Social Welfare Corporation Kongojushinkai)
 Members: Kazuo Kano (Koyasan University)
 Li Xuezhong (China Tibetology Research Center)
 Akira Yoshida (Ryukoku University)
 Shun'ei Matsushita (Otani University)
 Satoshi Hayashima (Ryukoku University)
 Yuki Takatsukasa (Kyoto University)
 Takeshi Yokoyama (Kyoto University)
 Mitsuru Kenchu (Ryukoku University)
 Takanori Fukita (Bukkyo University)
 Hironori Tanaka (Bukkyo University)

Synopsis

- I Salutation verses
 I.1 Taking refuge in the Three Jewels (verse 1, 2)
 I.2 Saluting the two teachers and presenting the motivation of composition (verse 3)
 II Autocommentary
 II.1 General statement (the Three Jewels and the two teachers)
 II.2 The six characteristics of the Buddha
 II.2.1 *Svabhāva*
 II.2.2 *Hetu*
 II.2.3 *Phala*
 II.2.4 *Karman*
 II.2.5 *Yoga*
 II.2.6 *Vṛtti*
 II.2.6.1 *sāmbhogīkākāya, nairmāṇīkākāya, svābhāvīkākāya*
 II.3 Application of the six characteristics to the Jewels of *Dharma* and *Sangha*

キーワード *Abhidharmasamuccaya-vyākhyā*, 『阿毘達磨雜集論』, 安慧